

**体験的な活動を通じた学生の学び  
～他大学学生と連携した活動の実践報告～**

黒崎 辰馬・櫻木 規美子・水崎 佑毅

**Student learning through experiential activities:  
A practical report on collaborative activities with  
students from other universities**

Tatsuma Kurosaki, Kimiko Sakuragi, Yuki Mizusaki

**神戸医療未来大学紀要 第24巻 第1号**

(令和5年12月)



## <研究ノート>

# 体験的な活動を通じた学生の学び ～他大学学生と連携した活動の実践報告～

黒崎 辰馬<sup>1)</sup>・櫻木 規美子<sup>1)</sup>・水崎 佑毅<sup>2)</sup>

## Student learning through experiential activities: A practical report on collaborative activities with students from other universities

Tatsuma Kurosaki<sup>1)</sup>, Kimiko Sakuragi<sup>1)</sup>, Yuki Mizusaki<sup>2)</sup>

With the objectives of "acquiring and improving abilities and qualities necessary for working adults," "providing opportunities for hands-on activities," and "conducting activities that contribute to the community and society," we used the community as an educational field and provided students with opportunities for hands-on activities aimed at solving social and community issues. We herein report these activities. We collaborated with other universities to conduct these activities. The first session focused on "learning about, experiencing, and disseminating information on regional characteristics," the second session on "learning what is needed to increase the number of event participants by utilizing the resources of the region, the university, and the individual students who planned the events," and the third session on "actually getting involved with the region." It is believed that conducting diverse, hands-on activities helped students acquire the skills they would eventually need in society. In addition, learning that transcended regional and university boundaries and exchanges with students and faculty members of other universities were valuable experiences for the students, something they could not experience in their normal lives. We hope to continue this program in the future in order to deepen student learning and contribute to the revitalization of the region.

**Key words** : Experiential activity, Inter-university exchange, Community contribution, Problem solving, Fundamental skills for working persons  
体験活動、他大学間交流、地域貢献、課題解決、社会人基礎力

### 1. はじめに

現在、一般社団法人日本経済団体連合会(以下、経団連)は、大学生に対して、リテラシー(数理的推論・データ分析力、論理的文章表現力、外国語コミュニケーション力等)、論理的思考力と規範的判断力、課題発見・解決能力、未来社会を構想・設計する力、高度専門職に必要な知識・能力を有して卒業するこ

とを期待している<sup>1)</sup>。他にも、失敗を恐れずに挑戦する姿勢や自己肯定感、忍耐力、リーダーシップ、チームワーク、主体的に学び続ける力なども重要な能力として挙げられている<sup>2) 3)</sup>。こうした社会からのニーズに応えるため、学習者が主体的に課題に取り組む学習方法(Project Based Learning: 以下、PBL)が能力を向上させるために有用であると考えられている。PBLとは、学習者があるテー

1) 神戸医療未来大学 (Kobe University of Future Health Sciences) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5  
2) 周南公立大学 (Shunan University) 〒745-8566 山口県周南市学園台843-4-2

マに対し、自ら考えて課題を発見し、さらにその問題解決に取り組むという実践型の学習方法である。現在、文部科学省が奨励している「主体的・対話的で深い学び」<sup>4) 5) 6) 7)</sup>の実現に通じる方法であるといえる。また、地域に所在する大学が『『地域における知の中核拠点』としての機能を高め、地域の成長の駆動力となること』が求められている<sup>1)</sup>。大学が地域課題の解決や地域活性化の推進を行い、地方創生の原動力となることは、教育基本法第七条<sup>8)</sup>に定められる大学の役割を果たすものであり、大学の取り組むべき重要な課題の一つといえる。そのため、地域を教育のフィールドとし、社会の課題解決を目指した学習環境を整え、学生へ提供することは喫緊の課題である。

しかし、2019年12月、中国・武漢における発生を発端に世界的に大流行した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）により、多くの大学が遠隔授業（オンライン授業）を取り入れざるを得なくなった。内閣府の調査<sup>9) 10)</sup>では、2020年5月から12月までのオンライン授業の受講状況について、87.0%以上が「通常通りの授業をオンライン授業で受講した」と回答しているが、「一方的な授業が多い」や「対話や議論がしにくい」という不満も挙がっており<sup>9)</sup>、他者との交流の希薄化が問題となっている。事実、ベネッセ教育総合研究所の報告<sup>11)</sup>によると COVID-19流行後において、学内で「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」が「いない」もしくは「1人」と回答する学生が増加しており、学外の友人について尋ねた質問でも同様に、「いない」もしくは「1人」と回答する学生が増えたとされている。また、これらの原因として、COVID-19の感染拡大により「部活動・サークル」や「入学後のオリエンテーション」といった友人関係を構築するためのきっかけが

減少したということが報告されている。よって、社会の課題解決を目指した学習環境を整えるだけでなく、交流の希薄化を解消することを目指しながら学生に対して教育の機会を提供することが必要といえる。

そこで、地方に所在する3つの大学のゼミが連携し、それぞれの地域が抱える課題や社会問題について考える機会を提供した。また大学間交流を含めることで、学生の求める多様なニーズに対応することができ<sup>12)</sup>、知的好奇心を効果的に刺激することに繋がり<sup>13)</sup>、より深い学びの提供になると考えた。本稿では、その活動内容や学生の内省報告もしくは感想をもとに報告を行う。

## 2. プロジェクト立ち上げの経緯

### 2-1 プロジェクトの名称および理念・目的

活動をスタートするにあたり、プロジェクト名を「ワクドキャンプ」とした。ワクドキャンプは、「地域社会に貢献できる学生を育成する」という理念のもと、「ワクワク」「ドキドキ」するような体験や活動をしようという考えから立ち上げられたプロジェクトである。プロジェクトの運営にあたっては、次に掲げる3つの目的を念頭に置いた。

#### 1) 社会人として必要な能力・資質の獲得・向上

他大学の学生や地域の人々との交流、またプロジェクトや体験活動を通じて社会的スキルの獲得・向上を目指す。

#### 2) 体験活動の機会の提供

小学校、中学校、高等学校において体験活動（中でも直接体験）が推進されており<sup>14)</sup>、体験活動は大学生においても道徳的・精神的な成長を促すために有用である<sup>15)</sup>ということが報告されているため、普段の授業では体験できないような活動の場を提

供する。

### 3) 地域貢献・社会貢献活動の実施

地域の活性化や課題解決といった地域または社会が求める大学の役割を果たす。

## 2-2 プロジェクトの運営

ワクドキャンプは、3つの異なる地域に設置されている大学の教員によって運営される。運営を行うのは、神戸医療未来大学人間社会学部健康スポーツコミュニケーション学科 講師の黒崎辰馬、福山大学経済学部経済学科 助教の櫻木規美子（現・神戸医療未来大学人間社会学部健康スポーツコミュニケーション学科講師）、周南公立大学経済学部ビジネス戦略学科 講師の水崎佑毅の3名である。参加する学生は、各教員のゼミに所属する学生、または関係クラブの学生であった。

## 3. イベントの実施

各イベントへの参加受付は、募集要項を基に各大学の教員を通じて行った(資料1～3)。

### 3-1 第1回 福山大学が所在する地域でのイベント

第1回は、福山大学が所在する地域で実施した(図1)。福山市ではCOVID-19の影響により激減した観光客を回復させるために、福山ならではの食や文化、自然が満喫できるコンテンツといった魅力的な観光資源の発掘や情報発信の強化に取り組み、観光コンテンツの充実や観光地としての認知度の低さ、低い宿泊率の改善を図っている<sup>16)</sup>。一方、近隣市街地の尾道市は、県内・県外観光客共に増加傾向であり、中でもサイクリングを目的とした観光客は2013年から2017年までの5年間で約2.2倍に拡大しており、更なるブランド化を進め、国内外からの誘客を図っている<sup>17)</sup>。そこで、第1回の体験活動では「地域

の特性を知り、体験し、情報発信する」ことをテーマとした。また、自分たちが生活する地域の情報をどのように収集し、発信するかをグループで考えながら取り組むよう、活動内容を設定した。イベントの詳細は以下の通りである。

#### 1) 日程・場所

令和4年8月11日(木)～8月12日(金)、ふくやまふれ愛ランド、大浜崎キャンプ場

#### 2) 参加者

参加にあたってはイベント1週間前から体調管理シートでの体調管理を行い、参加制限を設け、COVID-19の感染拡大防止および予防に努めた。直前や当日の体調不良も有り、当初の予定から変更し、当日は20名(教員3名、学生17名)が参加した。参加者の内訳は以下の通りである。神戸医療未来大学5名(教員1名、男子学生2名、女子学生2名)、周南公立大学6名(教員1名、男子学生3名、女子学生2名)、福山大学9名(教員1名、男子学生8名)。

#### 3) 活動内容

イベント当日(2日間)の主な活動は以下の通りである。

1日目:アイスブレイク(自己紹介など)、スコア・オリエンテーリング、野外炊飯(カレーライス)、花火、熱中症に関する講義  
2日目:散歩、体操、サイクリング(写真1)、BBQ、スラックライン(写真2)、ビーチバレー、スイカ割り

イベントに先立って、オンラインで顔合わせおよび打ち合わせを2回実施した(写真3)。1回目の打ち合わせでは、当日の参加者の紹介やワクドキャンプの目的などを共有し、2回目の打ち合わせでは、地域の特性について調査し、各グループでどういった体験活動ができるかを検討した。また、ゼミにおいても現地の情報について収集し、実施可能

## 2022年度 研修合宿 開催要項

1. 日 程：令和4年8月11日（木）～8月12日（金）
2. 場 所：ふくやまふれ愛ランド（公益財団法人福山市スポーツ協会 青少年育成課）  
〒720-0843  
福山市赤坂町大字赤坂甲7545番地 TEL 084-952-1177
3. 参 加：24名（教員3名、学生21名）  
神戸医療未来大学 6名（教員1名、学生5名）  
周南公立大学 7名（教員1名、学生6名）  
福山大学 11名（教員1名、学生10名）
4. 責任者：神戸医療未来大学 黒崎辰馬（神戸医療未来大学 人間社会学部 講師）  
周南公立大学 水崎佑毅（周南公立大学 経済学部 講師）  
福山大学 櫻木規美子（福山大学 経済学部 助教）
5. 費 用：5,000円（1泊3食）
6. 内 容：本合宿は、他大学生との交流を通じた新たな気づきや知見の獲得を目的とし、所属する大学（ゼミやクラブ）での取り組みの発表やグループでの話し合いなどの活動を行う。
7. 行 程

8月11日（木）	8月12日（金）
13：00 集合	6：30 起床
13：45 開会式	7：00 朝食
16：30 夕食	7：30 移動
20：00 入浴	8：00 サイクリング
21：00 ミニ講義（熱中症関連）	12：00 昼食
22：30 消灯	16：00 閉会式
	17：00 解散
8. 参加制限  
次の1)～7)に該当する者は参加できない。
  - 1) 体温が37.5℃以上ある者
  - 2) 体調不良者（発熱その他風邪の症状など、体調に異変がある者）
  - 3) 新型コロナウイルス感染症の陽性判定を受けた者
  - 4) 自宅待機指示を受けている者
  - 5) 新型コロナウイルス感染症の陽性と判明した者との濃厚接触がある者
  - 6) 同居家族や身近な知人の感染が疑われる者
  - 7) 政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域等への渡航及び該当国・地域の在住者との濃厚接触がある者
9. 新型コロナウイルス感染症感染予防対策について
  - ・ 3密の回避やこまめな手洗い・手指消毒、マスクの着用など、基本的な感染予防対策を徹底する
  - ・ 参加2週間前より毎日、体温と体調チェックを行う
  - ・ 研修施設利用時には、施設側の予防対策に準ずる（別添資料：新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大防止対策へのご協力（お願い）【施設利用のガイドライン（宿泊・日帰り利用）】）
  - ・ 研修施設以外でのマスク着用については、国の示す基本対策に準ずる（別添資料：屋外・屋内でのマスク着用について）

## 2022年度 第2回 研修合宿 開催要項

1. 日 程：令和5年2月9日（木）～2月10日（金）
2. 場 所：周南公立大学（大学体育館）  
〒745-8566  
山口県周南市学園台843-4-2 TEL 0834-28-0411
3. 参 加：17名（教員3名、学生14名）  
神戸医療未来大学 2名（教員1名、学生1名）  
周南公立大学 11名（教員1名、学生10名）  
福山大学 4名（教員1名、学生3名）
4. 責任者：神戸医療未来大学 黒崎辰馬（神戸医療未来大学 人間社会学部 講師）  
周南公立大学 水崎佑毅（周南公立大学 経済学部 講師）  
福山大学 櫻木規美子（福山大学 経済学部 助教）
5. 費 用：3,500円（9日、懇親会会費 ※その他宿泊・移動などは各自手配）
6. 内 容：本合宿は、他大学生との交流を通じた新たな気づきや知見の獲得を目的とし、所属する大学（ゼミやクラブ）での取り組みの発表やグループでの話し合いなどの活動を行う。
7. 行 程

2月9日（木）	2月10日（金）	3大学合同レクリエーション大会
15：00 集合（徳山駅）	10：30 集合、開会式	
15：30 開講式（周南市立徳山駅前図書館 交流室1）	11：00 午前の部 開始	
16：00 アイスブレイク	12：00 昼食	
ミニ講義（頭部外傷関連：講師 黒崎）	13：00 午後の部 開始	
18：00 懇親会	16：30 閉会式および閉講式	
	17：00 解散	
8. 参加制限  
次の1）～7）に該当する者は参加できない。
  - 1）体温が37.5℃以上ある者
  - 2）体調不良者（発熱その他風邪の症状など、体調に異変がある者）
  - 3）新型コロナウイルス感染症の陽性判定を受けた者
  - 4）自宅待機指示を受けている者
  - 5）新型コロナウイルス感染症の陽性と判明した者との濃厚接触がある者
  - 6）同居家族や身近な知人の感染が疑われる者
  - 7）政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域等への渡航及び該国・地域の在住者との濃厚接触がある者
9. 新型コロナウイルス感染症感染予防対策について
  - ・3密の回避やこまめな手洗い・手指消毒、マスクの着用など、基本的な感染予防対策を徹底する
  - ・体温と体調チェックを行う

## 2023年度 研修合宿 開催要項

1. 日 程：令和5年8月11日（金）～8月13日（日）
2. 場 所：神戸医療未来大学  
〒679-2218  
兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5 TEL 0790-22-2620
3. 参 加：14名（教員3名、学生11名）  
神戸医療未来大学 7名（教員2名、学生5名）  
周南公立大学 7名（教員1名、学生6名）
4. 責任者：神戸医療未来大学 黒崎辰馬（神戸医療未来大学 人間社会学部 講師）  
神戸医療未来大学 櫻木規美子（神戸医療未来大学 人間社会学部 講師）  
周南公立大学 水崎佑毅（周南公立大学 経済学部 講師）
5. 費 用：3,500円（11日懇親会費3,000円、12日昼食代500円）
6. 内 容：本研修は、他大学生との交流を通じた新たな気づきや知見の獲得を目的とし、所属する大学（ゼミやクラブ）での取り組みの発表やグループでの話し合いなどの活動を行う。今回は、持続可能な開発目標（SDGs）や社会課題に焦点を当てた活動（下記参照）を通じて、地域社会と環境の持続可能性について学ぶ。
7. 行 程：  
8月11日（金）  
14：00 開講式（アイスブレイク）アイスブレイク担当：水崎ゼミ  
15：00 竹細工・工作体験  
18：00 懇親会（場所：学内）  
8月12日（土）  
9：30 未来パビリオン集合  
10：00 竹細工体験&準備  
12：00 流しそうめんイベント  
14：00 子どもたちとの交流（運動遊びなど）  
15：00 子ども解散  
16：00 片付け、グループ活動  
17：00 終了  
8月13日（日）  
9：30 未来パビリオン集合  
10：00 閉講式（発表会）プレゼン or ポスター  
11：30 解散  
※各日の食事（朝・昼・夜）は各自で行う（12日の昼食は準備の必要なし）
8. 持参物：使わなくなったTシャツ（白色、綿100%）



# 2022 ワクドキャンプ

やきにくは  
まかせろ!!

**当日の  
天気は  
“晴”**

**福山市**

福山市は瀬戸内海沿岸の中央、広島県東部に位置し、穏やかな気候と豊かな自然に恵まれた人口46万人の中核市

**8月11日**

**8月12日**

**持ち物**

- ・帽子
- ・サンダル
- ・着替え
- ・ペン

**Point**

潮待ちの港で歴史と文化をはぐくむ街

**8月11日**

- 13:00 集合
- 13:45 開会式
- 記念品交換
- 16:30 野外炊飯
- 20:00 入浴
- 21:00 ミニ講義
- 22:30 消灯

**8月12日**

- 6:30 起床・散歩
- 7:00 朝食
- 7:30 移動
- 8:00 サイクリング
- 12:00 BBQ
- アクティビティ
- 16:00 閉会式
- 17:00 解散

**利用施設**

ふくやまふれ愛ランド  
〒720-0843 福山市赤坂町大字赤坂甲7545番地  
☎084-952-1177

大浜崎キャンプ場  
〒722-2101 広島県尾道市因島大浜町  
☎0845-24-1243

**活動の目安**

WBGT

- 31以上 運動は原則中止
- 28～31 厳重警戒（激しい運動は中止）
- 25～28 警戒（積極的に休憩）
- 21～25 注意（積極的に水分補給）

図1 第1回ワクドキャンプのしおり



写真1 サイクリング出発前



写真3 オンライン顔合わせ



写真2 スラックライン

な活動について検討した。

初日は、オリエンテーリングや野外炊飯といった活動を行い、就寝前に翌日のスケジュール確認と熱中症への意識付けおよび対

策として、熱中症に関するミニ講義を実施した。2日目は、朝から尾道市へ移動し、しまなみ海道をレンタサイクルで移動し、キャンプ場で昼食を摂った。キャンプ場では、スラックラインやビーチバレーなどのアクティビティも行った。この回では、「情報発信する」ということをグループ活動の課題としていたため、学生らは2日間で様々なアクティビティを体験すると同時に情報発信のための素材集めも行った。イベント終了後、集めた素材をグループでまとめ、地域の魅力をアピールする動画 (<https://youtu.be/M1RzG9Rdh38>) を作成し、オンライン発表会で共有した。

4) 参加者の感想

イベントに対する感想を参加者全員から得た。量が多いため一部抜粋したものを表1にまとめた。なお、誤字脱字や個人が特定できるような文言については筆者にて修正した。

ある参加者は「他大学の学生との交流をあまりしたことがなかったため、緊張し、あまり乗り気ではなかった」といったネガティブ

な気持ちから「みんなで協力して何か1つのことに取り組むことは、仲を深めるだけでなく、自分の成長にもつながることを改めて感じた」といったポジティブな感情に変化しているようであった。こうした感情の変化は、次回、同様の場面に直面した際に前向きに捉えることにつながるのではないかと考える。また、「協力することや、計画を立てて伝え

表1 第1回ワクドキャンプ参加者の感想

<p>最初は正直他大学との交流をあんまりしたことがなかったのですが、緊張したしあまり乗り気ではなかったけど、1日目の活動を通してお互いを知り、新たなつながりができて嬉しかったです。また、みんなで協力して何か1つのことに取り組むことは、仲を深めるだけでなく、自分の成長にもつながることを改めて感じました。この2日間充実した日になって、思い出に残りました。</p>
<p>このゼミ合宿では、本当に濃い2日間を過ごすことが出来たと思います。キツイって思ったり、暑すぎたえれん。って弱音が出ちゃうこともあったんですけど、他大学の学生と協力して頑張ることが出来ました。この2日間で、協力することや、計画を立てて伝えて行動すること、コミュニケーションの大切さ、役割分担など、改めて社会に出て必要なことでとても大切なことだと思えました。</p>
<p>この2日間を通して普段出会えることのない人達と活動できたことで自分の中の人脈も広がり、なにより楽しい2日を過ごすことができた。また2回、3回があるかはわからないけど、もし開催されるなら参加したいと思った。</p>
<p>周りとのコミュニケーションを多く取り自分が何をしたいかや周りの役割など確認して自分のやるべき事を言葉にして活動できたと思います。自分達のグループ以外との交流も宿泊施設での自由時間や海、サイクリングなどで交流することができ良かったと思いました。学年を意識することなく話すことができ気軽に関わって行けたと思います。また、機会があれば行ってみたいなと思いました。</p>
<p>想像よりかなり疲れましたが、その分かなり楽しむことが出来ました！他校との交流も、数に差はあったものの割と満遍なく全員と話し、楽しむことが出来ました。今回、真夏ということもあってか想像よりきつかったので、もしこれから何回も続いていくのであれば、体ばかりでなく頭も一緒に使ったりするプログラムもあればいいかなと思いました。全体的にすごい楽しかったので、第2回・第3回と続いて行って欲しいと思います！</p>
<p>この一泊2日では普段経験できないことを会ったばかりの人達とするということが自分にとって大きなものでした！みんなで力を合わせて目標達成に向けて頑張ったりご飯を作ったりを通してコミュニケーションをとる機会も増えていき、それと共に友好関係も深まり最高の時間でした！これまで違う大学の人と関わる機会が全くなかったのが今回このような合宿ができて本当に楽しかったです！次回も楽しみにしています！！</p>
<p>ワクドキャンプ、とても楽しかったです。初めは緊張していましたが、活動をしていく中で緊張もほぐれ楽しむことができました。これまで、他大学との交流が無かったので今回の合宿はとても楽しく、刺激をもらうことができました。人との繋がりを大切にしていきたいと改めて感じる事ができた2日間でした。第2回もたのしみです！</p>
<p>このようなキャンプに参加するのは初めてではありませんでしたが久しぶりにキャンプをしたので始まる前からワクワクしていました。住んでいる場所や考え方が一切違う状態で初めて出会う人同士が協力して何かを成し遂げたり行動することは新たな人間関係が生まれる瞬間を垣間見た気がしてワクワクドキドキしました。第2回があれば是非とも参加したいです！</p>

て行動すること、コミュニケーションの大切さ、役割分担の仕方など、改めて社会に出て必要なことでとても大切なことだと思えた」といった感想などから、初めて会う人と協力して目標を達成したり、課題を解決したりすることで「他者と協働すること」の大切さを実感し、地域の課題について触れ、解決に向け実行することで「自分で考え、計画し、実行する」といった能力を高めることにつながったと考える。さらに今回、学生が課題についてアプローチするだけでなく、他者と協働するためにコミュニケーションを図ったり、積極的に関わったりすることで学生間の交流を深める機会となったと考える。これらのことは、今後イベントを企画・運営することに役立つといえる。

### 3-2 第2回 周南公立大学が所在する地域でのイベント

第2回は、周南公立大学が所在する地域で実施した。周南市では、令和6年までに観光客数を180万人まで増やすことを目的としている。2018年時点の観光客数は165万人となっているが、観光客数を増やすために取り組まれているイベントの参加者数は、年々減少している<sup>18)</sup>。そのため、180万人達成に向けたイベント参加者数を増やす取り組みが求められている。そこで、第2回の体験活動では「地域や大学、そして企画者である学生個人の資源を活用し、イベントの参加者数を増やすためには何が必要か知る」ことをテーマにした。次のイベントに繋げるために、地域住民が参加することを想定したイベントの企画・運営に取り組むよう、活動内容を設定した。イベントの詳細は以下の通りである。

#### 1) 日程・場所

令和5年2月9日(木)～2月10日(金)、周南市立徳山駅前図書館 交流室、周南公立

大学体育館

#### 2) 参加者

第2回についても、参加制限を設け、COVID-19の感染拡大防止および予防徹底に努めた。当日の参加は17名(教員3名、学生14名)であった。参加者の内訳は、神戸医療未来大学が2名(教員1名、男子学生1名)、周南公立大学が11名(教員1名、男子学生7名、女子学生3名)、福山大学が4名(教員1名、男子学生3名)であった。

#### 3) 活動内容

イベント当日(2日間)の主な活動は以下の通りである。

1日目:アイスブレイク(自己紹介など)、懇親会

2日目:レクリエーション大会(ホッケー、ドッジビー、長縄、バスケ、障害物リレー、バレー、フットサル、リレー)

初日は、学生間の仲を深めるということを目的にアイスブレイク(写真4)と懇親会を行った。アイスブレイクを行った周南市立徳山駅前図書館の交流室は、駅に隣接しておりアクセスが良く、図書館利用者からも見ることができる構造のため活動PRに向いており、活動の資源としてかなり貴重であると感じた。なお、当初予定していたミニ講義については、時間の都合上、省略した。

2日目は、周南公立大学水崎ゼミの学生が



写真4 アイスブレイクの様子

主となり、レクリエーション大会の準備・運営を行った。午前4種目（ホッケー、ドッジビー、長縄、バスケット）、午後4種目（障害物リレー、バレー、フットサル、リレー）の計8種目を行った。運営は水崎ゼミの学生が主ではあったが、水崎ゼミの学生の指示のもと、全学生が準備から片付けまでを行い、学生みの運営でイベントを実施した。

#### 4) 参加者の感想

全体での感想が得られていないため、得られた回答の一部を以下に示す。

この回の感想として、「大学の垣根を越えた深い交流ができた」「最初は緊張していたけれど、徐々に打ち解けていって一緒に1泊2日を過ごして良かった」「新たな出会いがあった時に積極的にコミュニケーションを取って関係性を作る大切さを学んだ」「学んだことを社会人になっても活かしていきたいと思う」という回答を得た。またこの回では、学生がすべての運営を行ったので、「教育実習の良い事前準備になった」といった声も聞かれた。

このように、第2回のイベントでも学生は「主体的に動く」や「他者に働きかける」とい

た多くの社会的スキルを学ぶ体験をできたのではないかと考える。また、この回では地域住民の参加をイメージして企画をしたため、運営後に行った聞き取りでは、スポーツについて短時間で詳細かつ的確に説明を行うことや、適度な活動時間の設定、単発のイベントではなく、次のイベントに繋げるための工夫について考えるような発言が多かった。こうした意識の変化は、周南市の観光客数を増やすためのイベントの企画に大いに役に立つといえる。

### 3-3 第3回 神戸医療未来大学が所在する地域でのイベント

第3回は、神戸医療未来大学が所在する地域で実施した（図2）。これまでに地域の特性を知ることや地域や大学、自身の資源について知ることを学んできたため、第3回の体験活動では、「実際に地域と関わりを持つ」ことをテーマとした。福崎町では現在、住民が気軽にスポーツやレクリエーション活動に参加でき、コミュニケーションを図るとともに健康の増進と体力の向上が目指すことができる機会の提供や住民の防災意識の向上とい



#### 参考文献

- ※1 外務省: “SDGとは?”, 外務省. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/edgs/about/index.html> (参照: 2023-08-01)
- ※2 おおむら株式会社: “竹藪はいつまで経っても緑? 日本の放牧竹林の現状と課題”, Bamboo roll 行でスナック・リゾートへ!～お庭楽屋, 2023-09-07. [https://bambooroll.jp/blog/study/bamboo\\_utilization](https://bambooroll.jp/blog/study/bamboo_utilization) (参照: 2023-07-30)
- ※3 藤井 真, “古くは薬物について考える”, 国民生活センター, 2021-04. [chrome-extension://efadnbmnnlbpcajpcgkcfndmkaj/https://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-202104\\_06.pdf](https://www.kokusen.go.jp/wko/pdf/wko-202104_06.pdf) (参照: 2023-07-30)
- ※4 菊池 龍: “福崎町 福崎の子ども体験施設に、住民への防災意識は”, DIAMOND online, 2023-04-23. <https://diamond.jp/articles/?320232> (参照: 2023-07-30)

#### アクセス

JR 福崎駅よりスクールバス(東線 5分)



#### 問い合わせ先および非常時連絡先

黒崎辰馬 (神戸医療未来大学 講師)  
 TEL: 080-5261-5282 (携帯)  
 E-MAIL: t-kuroasaki@sw.kinwu.ac.jp



図2 第3回ワクドキャンプのしおり (表紙・裏表紙)

たことを推進している<sup>19)</sup>。そのため、関わりを持つ上で、運動機会の提供、防災意識の向上といった点に焦点を当てた。また現在、世界的に取り組まれているSDGsについても触れた。イベントの詳細は以下の通りである。

#### 1) 日程・場所

令和5年8月11日（金）～8月13日（日）、  
場所：神戸医療未来大学（造形室、F棟1階、パビリオンみらい、多目的ホール）

#### 2) 参加者

第3回については、参加にあたり特に制限を設けなかったが、体調不良者については無理のないよう休むようにと事前に周知した。また、令和5年度より櫻木規美子が福山大学から神戸医療未来大学に異動したため、当年度は2大学の参加となった。当日の参加は14名（教員3名、学生11名）であった。参加者の内訳は、神戸医療未来大学7名（教員2名、男子学生2名、女子学生3名）、周南公立大学が7名（教員1名、男子学生6名）であった。

地域からの参加は10名（3世帯、保護者4名、子ども6名）であった。

#### 3) 活動内容

イベント当日（3日間）の主な活動は以下の通りである。

1日目：防災（竹害）に関するミニ講義、アイズブレイク（自己紹介など）、タイダイ染め体験（写真5）、竹の伐採、竹箸・竹



写真5 タイダイ染め作業

皿づくり、BBQ

2日目：竹の伐採、そうめん流しの土台作り（写真6）、地域子どもたちとの交流、そうめん流し

3日目：SDGsや地域課題・社会課題に対する取り組みに関する発表

今回は、「実際に地域と関わりを持つ」ということを目的に、学生自身がどのように地域や社会と結びつくか、地域課題や持続可能な開発目標（SDGs）に焦点を当てた活動を行った。

初日は、身近な防災知識として、竹害に関するミニ講義を行った後、タイダイ染め体験、竹を使った竹箸・竹皿づくりなど、身近にあるものから社会課題について考える活動をメインに行った。2日目は、地域子どもたちと交流し、自分たちが持っている資源を地域の住民に提供するといった活動を行った。3日目は、当イベントの総括として、現在の地域や社会の課題について改めて考え、自分たちにできることをグループでまとめ、発表し、全体で共有した。

#### 4) 参加者の感想

イベントに対する感想を学生およびイベントに参加した子どもの保護者から得た。量が多いため一部抜粋したものを表2、3にまとめた。また、誤字脱字や個人が特定できるような文言については筆者にて修正した。



写真6 そうめん流しの土台作り

表2 第3回ワクドキャンプ参加者（学生）の感想

<p>私は今回やったイベント全部やったことがなく、全てが私にとって新鮮なことでした。みんなで一つのものを作り上げることができてよかったです。また、自分たちで作ったものを地域の方々に共有して一緒に使って楽しむということもすごく感慨深いものだと思います。作る作業は本当に大変で難しかったし上手くできるか不安でした。でも友達や地域の方が楽しそうにしているのをみて頑張ってたかったと思えたし、また挑戦してみたいと思いました。</p>
<p>最初は他の大学の人と関わるのは不安で緊張していたけど、他大学の人全員が優しく気軽に話してくれたので自分もありのままに関わることが出来ました。自分たちがまず体験することで他の人にも伝えることが出来るので他にも率先して体験していきたいなと思いました。</p>
<p>教職の模擬授業や教育実習に向けて参考になった。今回、楽しく学ぶことができて世界規模での課題への取り組みを行うことができた。また、これらの課題改善に取り組む中で様々な視点からの学びを得ることができた。</p>
<p>ワクドキャンプで他大学の学生と一緒に活動して、たった3日間でこんなに仲良くなれてとても嬉しかったです。正直参加する前はそんなに乗り気ではなかったし、楽しめるか不安でしたが、この3日間のキャンプに参加して、SDGsについて学ぶことができ、グループの人と話し合っって新しいことが発見出来て、とても学びの多いとても楽しい3日間になりました。</p>
<p>私はこのワクドキャンプをする前までは、新しい人たちと何かを協力して行うということに仲良くできるのかや上手く作業が進めるかに対して、不安を感じていました。そのため、ワクワクという感情よりもドキドキという感情の方が大きかったです。しかし、このワクドキャンプを通じて、私はさらに大きく成長することができました。行って良かったなと感じることが出来るキャンプでした。新たな学び、発見をすることができたと感じました。</p>
<p>はじめは行った事のない県に自分達で行き、知り合いのいない大学でドキドキしながら教室に入った事を覚えています。普段とは違った環境で2泊3日が始まり、自分はあまり人前で話す事が得意という訳ではないですが隣にいた他大学の学生に自分から話す事ができ、いい雰囲気に変える事が出来たことは良かったと思いました。普段関わる事のない大学の学生や先生方との交流ができ、SDGsなどの社会課題に向き合う時間ができた事もよかったですと思いました。</p>
<p>今回のワクドキャンプに参加したことにより、様々な体験をすることができました。普段、新幹線などは全然使う機会が無いのだが、乗り慣れない新幹線を使って行くことになった。集合時間から逆算して何時に出発したら良いのか、お盆で他の利用者も多いから乗り換えなどは余裕がある便で行った方がいいかなどいろんな側面を考えながら新幹線のチケットを取る必要があった。大学に着くと、他大学の学生が教室に集まっていて少し緊張した。だが、自分たちが用意したアイスブレイクやTシャツ作りなどをすると次第に話せるようになった。またこのようなキャンプがあれば、ぜひ参加したいと思う。</p>
<p>流しそうめんが終わった後の竹が結局残ってしまったので、そこをどうするかをもう少し考える必要があったと感じました。残った竹を竹炭にしたりできたら次に活用することもできたと思います。</p>

表3 第3回ワクドキャンプ参加者（保護者）の感想

<p>先生方や学生さんが、様々、ご準備下さり、染め物体験、そうめん流しなど初めての体験に子供たちや家族も、積極的に楽しく参加させていただきました。</p> <p>コロナ禍でイベントは、久しぶりでしたが、たくさんの方との交流は、とても貴重な体験だったと思います。大学の立派な施設もお借りして、涼みながら参加させて頂き感謝しております。誘った知人も、体操教室に興味を持って下さり良い機会となりました。思い出に残る一日となりました。ありがとうございました。</p>
<p>Tシャツ染めやソーメン流し、体操も普段お家で出来ないことを体験させていただき、子供達も喜んでいました。</p>

学生は、自分たちのスポーツ関連資源を地域住民に提供することの意義を感じており、またSDGsという世界的な取り組みについて知ると同時にそれらに対して取り組んでいく意識ができていくようであった。参加した地域の子どもや保護者もイベントに満足していることから、地域の住民に対し、運動機会の提供や交流の場を提供できたと考える。

この回では、地域とどのように関わっていくかということや地域課題や世界的な課題を通じて考え、体験していくということを行った。第1回、第2回と同様に、この回でも学生が社会的スキルを獲得するための機会を提供できたと考える。また、地域の課題に対して取り組むことで、地域づくりに寄与したのではないかと考える。このことは現在、地域にある大学が求められている役割を果たすものだといえる。

## まとめ

本プロジェクトは、他大学の学生との体験活動を通じて「社会人として必要な能力・資質の獲得・向上」「体験活動の機会の提供」「地域貢献・社会貢献活動の実施」という3つの目的を念頭に運営を行ってきた。多様な体験活動は、「自ら踏み出す力」や「考える力」「他者と協働する力」といった社会に出ていく上で必要となるスキルを学生が身につけていく一助になったと考えられる。また、プロジェクトを通じて地域や大学を越えた学びを得ることができ、さらに他大学の学生や教員との交流は、通常の学生生活では体験できないことであり、学生にとって貴重な経験になったといえる。最後に、本プロジェクトをきっかけに学生同士で連絡を取り合い、他大学間で自ら交流をしていると聞いている。これも一つの成果の形ではないかと考えている。

## 今後の展開

今後、同様のイベントを継続的に実施していく上では、中塚らが指摘<sup>20)</sup>している通り、実施場所と費用について検討する必要がある。2大学で行う場合、どちらかの大学を拠点として実施するのか、もしくは第三の拠点を設定するのかなどを検討しなければならない。この移動のコストはイベントの実施回数に関係してくると考えられ、移動コストが小さければ頻繁に実施することができ、移動コストが高ければ実施頻度は少なくなる。また、今回の活動を実施するにあたり、参加に係る費用（移動費、宿泊費、参加費など）は学生個人が負担し、地域住民からは徴収していない。こうした費用の削減・減少が学生の参加に関係してくると考えられる。また現在、所得の低い家庭では教育や教養娯楽といった費目の支出割合が小さく、文化資本・教育資本に格差が生じているとされている<sup>21)</sup>。そのため、地域住民の参加費も極力徴収しないことで、誰でも参加できるイベントにすることができると考えている。そのため今後、学生だけでなくすべての人に参加してもらうためには、財源確保のシステム構築や助成金などの獲得といった費用の問題を解消する必要がある。また今回は、学生が事前に調査し、プログラムを実施するという形式であったため、今後は地域の特性に合わせたプロジェクトの提供だけでなく、地域のニーズに応じたプログラムの提供や、学生のニーズに合わせた活動内容も検討する余地がある。

## 注記および引用・参考文献

- 1) 日本経済団体連合会：新しい時代に対応した大学教育改革の推進－主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて－、

- 2022、[https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/003\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/003_honbun.pdf)（最終閲覧日 2023年 8月28日）
- 2) 日本経済団体連合会：Society 5.0に向けて求められる初等中等教育改革 第一次提言－with コロナ時代の教育に求められる取組み－、2020、[https://www.keidanren.or.jp/policy/2020/063\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2020/063_honbun.pdf)（最終閲覧日 2023年 8月28日）
- 3) 日本経済団体連合会：Society 5.0－ともに創造する未来－、2018、[https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095_honbun.pdf)（最終閲覧日 2023年 8月28日）
- 4) 文部科学省：幼稚園教育要領、2017、[https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領、2017、[https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_01.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）
- 6) 文部科学省：中学校学習指導要領、2017、[https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）
- 7) 文部科学省：高等学校学習指導要領、2018、[https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）
- 8) 教育基本法では、大学について「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と記されている。  
文部科学省：教育基本法、2006、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html)（最終閲覧日 2023年 8月 28日）
- 9) 内閣府：新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査、2020、<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/shiryo2.pdf>（最終閲覧日 2023年 8月24日）
- 10) 内閣府：第2回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査、2020、[https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result2\\_covid.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result2_covid.pdf)（最終閲覧日 2023年 8月 24日）
- 11) ベネッセ教育総合研究所：第4回 大学生の学習・生活実態調査報告書。2022年 7月 [https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/4\\_daigaku\\_chousa\\_all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/4_daigaku_chousa_all.pdf)（最終閲覧日 2023年 8月24日）
- 12) 笠原清志：大学間交流の理念と現実－大学のあり方を自ら問うことからの出発－、大学教育研究フォーラム、7、6-11、2002
- 13) 菊田文夫、佐々木一也、石渡貴之：特集 聖路加と立教－リベラルアーツ教育における大学間交流の意義－、大学教育研究フォーラム、28、6-22、2023
- 14) 文部科学省：1. 1. 体験活動の教育的意義、2008、[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm)（最終閲覧日 2023年 8月30日）
- 15) 松永由弥子、塚本博之、岩崎功：大学生の体験活動の現状と課題、静岡産業大学情報学部研究紀要、14、243-263、2012
- 16) 福山市：福山市観光振興基本戦略、2022、[https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/life/257126\\_1387846\\_misc.pdf](https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/uploaded/life/257126_1387846_misc.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）
- 17) 尾道市：尾道市自転車活用推進計画、2020、[https://www.city.onomichi.hiroshima.jp/uploaded/life/66040\\_171996\\_misc.pdf](https://www.city.onomichi.hiroshima.jp/uploaded/life/66040_171996_misc.pdf)（最終閲覧日 2023年 9月 6日）



- 18) 周南市：第3期周南観光ビジョン、2020、  
<https://www.city.shunan.lg.jp/uploaded/attachment/54949.pdf>（最終閲覧日 2023年9月6日）
- 19) 福崎町：福崎町第5次総合計画、2016、  
<https://www.town.fukusaki.hyogo.jp/0000001728.html>（最終閲覧日 2023年9月6日）
- 20) 中塚雅也、小田切徳美：大学地域連携の実態と課題、農村計画学会誌、35（1）、2016
- 21) 藤田英典：現代の貧困と子どもの発達・教育、発達心理学研究、23（4）、2012

